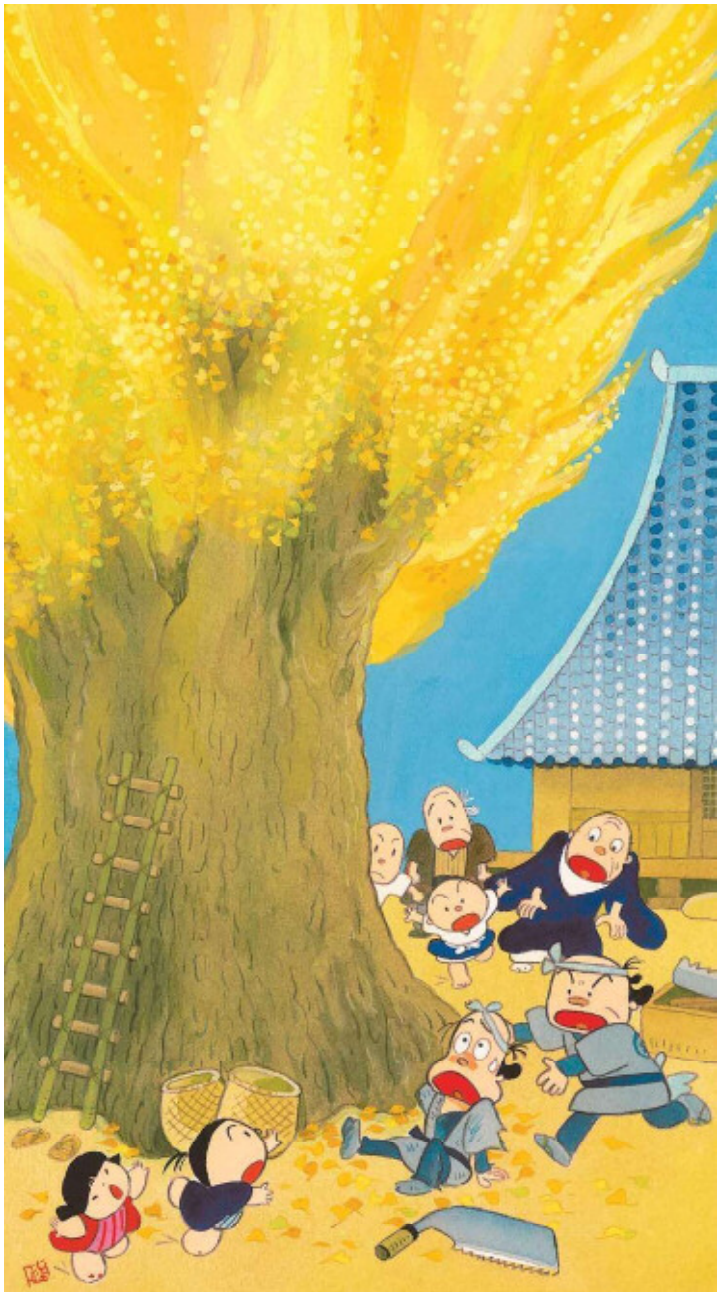
「広報しながわ」平成２０（２００８）年１１月１日号より転載
（イラスト：池原昭治）



【光福寺】
延暦元年（782）に建てられたといわれる天台宗のお寺でしたが、文永二年（1265）に了海上人によって天台宗から浄土真宗に改宗され、名前も「光福寺」に変わりました。了海上人は、善福寺（港区）のイチョウのひと枝をゆずり受け、境内に植えたといわれています。大木となったイチョウは、明治時代まで品川の海で魚をとる漁師たちの目印にもなったほどでした。

品川昔ばなし

大井

光福寺の大イチョウ

大井六丁目にある光福寺の境内には、高さ約四十メートル、幹の周りが約七メートルもある大きなイチョウがあります。区の天然記念物になっているこの大イチョウには、こんな話が残されています。

今から何百年も前のことです。お寺の庭の手入れをしていた植木職人の親方が、大きく伸びたイチョウの枝を切ろうと思い、弟子に声をかけました。「おい、あのイチョウの枝を切れ！」「親方、それはいけません」「なぜじゃ？」「この大イチョウにはたたりがあるんです」「そんなことがあるものか！ いちいち怖がっていたら、植木職人がつとまるか！」

弟子はしぶしぶ大イチョウに登り、のこぎりで枝を切ろうとしました。すると、どうしたはずみか、弟子は足をすべらせて地面に落ちてしまいました。親方や寺の人たちがかけつけると、気を失っていた弟子はやっと目をさましました。しかし、弟子はあたりをキョロキョロ見回すだけで、ひと言も話そうとしません。「どうした、わかるか⁉」「大丈夫か？」と声をかけましたが、弟子はただ「あー、あー」というだけで、言葉をひと言も話せなくなってしまいました。

その翌日の夕方のことです。「さっきからずっとイチョウばかりを見つめて、どういたしました？」と、お寺にいるおじいさんが親方に声をかけました。「だって、いまいましいじゃないか。昨日は若い者が落ちて、口がきけなくなってしまったんだから」「このイチョウには刃物を入れてはいけないと昔から言われていますから」「たたりなんかあるものか。よし、わしが枝を切ってやる！」

おじいさんが止めるのもきかず、親方ははしごを登っていきました。長く伸びた枝にのこぎりを入れたときです。親方はまっさかさまに落ちて庭の石に頭を打ちつけ、そのまま息たえてしまいました。

それからというもの、このイチョウは切られることなく樹齢を重ねました。

現在は、樹形を整えるために、せん定をすることがあります。